

2012 年度講演会

2012 年度講演会は、国際開発コンサルタントの白井和子氏を講師にお迎えし、「国際協力とコミュニケーション力」と題して、10 月 19 日午後 5 時より、中央教育研究棟 402 教室で開催された。国際協力とはどんな仕事なのか、ご自身の経験をまじえてわかりやすく説明してくださった。PCM 手法を用いた課題解決のためのシミュレーションもあり、会場の聴衆が参加して大いに盛り上がった。また、国際協力の分野で必要なコミュニケーション力については、現場体験者ならではの視点での話を伺うことができた。講演後も、活発な質疑応答がなされた。

* * *

「国際協力とコミュニケーション力^{りょく}」

白井和子氏

(株式会社 VSOC 国際開発コンサルタント)

私は明治学院大学の文学部英文科卒です。大学卒業当時はあまり「国際協力」には関心も知識もなく、そのまま一般企業に入りました。その後、川崎市の国際交流関係の財団に転職した際に、当時の難民と思われるイラン人の親子がアパートの仲介を頼みに来ました。そのとき、何も手伝うことが出来なかったのが「難民」や「途上国」について考え始めるきっかけとなりました。その後、国際援助を行うボランティア活動に目覚めて仕事帰りに日本国際ボランティア

センターという NGO に通い始めるうち、きちんと勉強しないとダメだ、と気づいてアメリカの大学院で途上国の開発に関して学んだのが20年前。当時、海外の大学院に留学すると国連などの国際機関、外務省、JICA に就職というのが一般的な進路と考えられていましたが、敢えて、JOCV という国費で行うボランティア活動に参加しました。現場の一番末端の住民と共に活動することは、国際協力の現場を一生の仕事とするために必須と考えたからです。帰国後、FASID という、当時外務省所管の財団に入って、PCM という開発援助プロジェクトの運営管理手法の開発や普及に携わることになりました。FASID には13年ほど勤務し、昨年4月からは、現在所属しているコンサルタント企業で主に JICA の業務を行っています。

私が携わっているのは、政府開発援助、ODA (Official Development Assistance) と呼ばれる形態での国際協力です。ODA は2つ種類あり、政府対政府の2国間援助、国連などに資金を拠出して行う援助があります。私はこのうちの2国間援助のほうです。2国間援助はお金を相手側政府に貸す政府貸付と、資金を何らかの形に変えて差し上げる贈与、に分かれます。私が携わるのは「贈与」に分類され、贈与は更に無償資金協力と技術協力事業に分かれますが、私は後者の技術協力事業にコンサルタントとして関わっています。「コンサルタント」である私たちは民間人として JICA が実施する様々な事業を請け負っています。

さて、「技術協力プロジェクト」では、途上国の社会・経済の持続可能な発展の担い手となる人材を育成するために、主に専門家派遣、機材供与、関係者の日本での研修の3つの業務を行っています。分野は教育、医療など様々ですが私が得意としているのは、農業・農村開発分野や地方行政の分野です。なお、「無償資金協力」は、開発途上国が経済社会開発のために必要な資機材、設備およびサービスを購入するために必要な資金を贈与するもので、いわゆる現物供与は行っていません。

次に最近10年間の各国の ODA 資金の比較表を見ると、日本は2002年より以前は1位、その後はアメリカに次ぐ2位でしたが、最近ではアメリカ、ドイツ、イギリス、フランスに次いで5位という状況。最近の経済状況からも日本では

国内での課題に税金を使うようにとの声が大きく援助額は伸び悩んでいます。他方、アメリカが突出しているのは、イラクやアフガニスタンへの復興支援、麻薬撲滅支援に拠るもので、政治と ODA が密接に関係しているといえます。また、最近では中国、韓国など ODA 新興国の躍進が目覚ましいです。特に中国は最近どこに行っても非常に目立つ存在ですが、OECD - DAC に加盟していないので実態は掴めていません。アフリカなどでの公共事業が顕著ですが、鉱物資源の獲得を目指した支援だともいわれています。

これまで JICA の仕事で訪れた国を紹介します。殆ど東南アジア、南アジアに集中しています。元々協力隊でネパールに 2 年間住んでいたこともあり、アジアの国々が身近です。最近では西アフリカのシエラレオネやキルギスという中央アジアの国でも業務を行いました。両国とも多数の民族が絡み合った社会です。また、シエラレオネやミャンマーなどは紛争を経験し民族同士が殺しあう歴史を背負っている国々では公平な支援が非常に難しいと感じます。来月はカンボジア、年明けはフィリピンに行く予定です。様々な国でどうやって上手く現地の人々、日本人とコミュニケーションをとりながら仕事をしているのか、について、後で触れたいと思います。

私が行っている業務の 1 つめである JICA プロジェクトの評価は、JICA では「P (Plan 事前計画)、D (Do 実施)、C (Check 事後評価) A(Action フィードバック)サイクル」の考え方に基づいて行われています。また、PCM (プロジェクト・サイクル・マネジメント) 手法研修の講師の講師も行っています。これまで JICA 職員、国際開発コンサルタント、大学院生、アフリカ、アジア圏の JICA 研修生、JICA 在外事務所ナショナルスタッフ、留学生などを対象に研修を行ってきました。特に留学生への研修では日本人学生も一緒に行いますが、コミュニケーション力が弱い日本人学生が多く、中には研修中泣き出してしまふ学生もいたほどです。英語での議論についていけない、慣れていないと感じています。

「技術協力プロジェクトの評価業務」がどのようなものか、時系列で簡単に説明します。詳細計画策定調査は、プロジェクトが始まる前に、プロジェクトの目標やそれに至るプロセス、どのような人材や機材が必要か、などプロジェク

トの枠組みについて相手国政府と合意するための調査です。そうした調査の中での私の役割は調査前の文献調査、インタビュー用の質問票作成、現地調査中は実際のインタビューや協議出席など、帰国後は報告書作成を行います。これらの業務では常に使用言語が日本語と英語で、読むのも書くのも交渉も両方の言語が必要です。「将来は勉強した語学を活かした仕事に就きたい」との希望を持たれる学生さんも多いと思いますが、非常に適した仕事といえます。具体的に望まれるレベルの語学力の目安は、私見ですが、TOEICで900点以上であるとよいと思います。英語だと競争が激しいですが、仏語、西語が出来る人は少なく、また国連の公用語でもあることから仏語、西語が出来ることは大きなアドバンテージといえます。

PCM手法を使った課題解決のシュミレーションを実施についてお話します。全てのプロジェクトではありませんが、PCM手法を使って、途上国の現状や課題を論理的に捉えて、そこの国の人たちと一緒に問題を解決するためのプロジェクトとしての計画を立てます。そうして出来上がるのが、PDM（プロジェクトデザインマトリックス）と呼ばれる計画概要書です。この表はプロジェクトの目指す目標やそれを達成させるための小さな目標群、それらを達成させるための具体的活動、外部のリスクやプロジェクトに必要な投入（人材、機材、資金）などが一目でわかる構成となっています。

評価についても簡単に触れます。JICAの評価は計画と実際にどの程度何を行ったか、との実績を比較する作業です。その比較の際の視点となるのが、「評価5項目」と呼ばれるもので、妥当性、有効性、効率性、インパクト、持続性の5つでOECD - DAC（先進国の途上国支援に関する集まり）の推奨を受けています。こうして比較を行った結果、結論を得、その結論を基に当該案件向けの提言と類似案件向けの教訓を導きだします。こうした評価業務も相手国政府の関係者と共に行い、日本のODAを援助する側、受ける側双方での説明責任や透明性を確保しているのですが、そうした業務に参加し、関係書類を作り、交渉のお手伝いをするのが私の役割です。

さて、様々な国でODAの仕事の末端を担っていますが、常にコミュニケー

ションの重要性を感じながら仕事をしています。コミュニケーションといえば、先ず言葉を思い浮かべると思います。ODA 業務に従事する中で、読む、書く、話す、全てにおいて高いコミュニケーション能力が問われるのは間違いありません。言語の種類は、英語はもちろんですが、出来ればフランス語、スペイン語が出来るともっと仕事の幅が増えます。出来る人は少ないので、例えばみなさんの中にもフランス語、スペイン語を勉強している学生さん多いと思いますが、物凄く貴重です。ぜひしっかり勉強して、援助業界で語学を活かして頂きたいです。

求められるレベルは、少なくとも英語は高いですが、日常で使う英語は実はせいぜい高校レベルで幾つかの業界用語さえわかっていたら、あとは如何に正確にこちらの意図を伝え相手の話を理解するか？に腐心します。途上国の英語はアメリカやイギリス人の英語とは違い、それぞれの国のアクセントや言い回しが皆違います。慣れた頃に出張が終わるのもしばしばです。逆にいうと、ジャパニーズイングリッシュでも全く問題ないということ。また、話し方も、例えばバングラデシュでは流暢な英語が尊重されますが、カンボジアではゆっくり、たどたどしい英語のほうが却って受け入れられるという具合に、国によっても変わります。一方で、報告書など文書を書く際は、正確さとともに、洗練された言い回しが必要であり、国際機関の報告書を読むなど日々勉強です。

「論理性と感情」についてどう考えているか、ですが日本語はとても非論理的な言語だと考えます。例えば日本語は主語がなくとも伝わる。他方、英語は主語なしには文章にならない。日本語の書類を英語に直すと如何に非論理的な伝わりにくい言語であるか、に気づくことがあります。思考も含めて論理的に物事を捉えて説明できることは外国で働く場合に非常に重要と考えます。例えば PCM 手法はシンプルですが論理的な手法です。途上国を始め世界の様々な国で広く使われるのも明確な論理性に裏付けされていることも大きいと考えます。かといって、感情はいらぬのか？というところではありません。逆に、感情は政府対政府との交渉でもやはり重要なものでは？と感ずることが多いです。

言葉以外のコミュニケーションといえば、目をしっかり見ながら、はっきり

ともを話すのが重要です。自信を持って話すとそれらしく聞こえるものであり、「伝えたい」「理解したい」という気持ちがまっすぐな視線を生みます。また、笑顔やちょっとしたしぐさも、相手と分かり合えると感じる瞬間です。おそらく、話の内容にも拠りますが、現地調査を行う短期間に相手との理解を如何に深められるか？が仕事の出来不出来に大きく影響があるので、こうした点も重要と考えます

私の関わる国際協力の領域は本当に小さく、末端の部分でしかありませんが、一つ一つの仕事に心をこめて従事しているつもりです。コミュニケーションは「心」だといつも思いますし、途上国の人の立場に立ちつつも客観的に物事を捉え、様々な問題の解決の糸口を共に探していく作業であると感じています。それぞれの国で背負った歴史、経済、民族、言葉、全てが異なる中で、コミュニケーション力は鍛えられていくものだ、とも感じています。

以上